

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

多様性を活かしてこそ

沖縄県

琉球大学教育学部附属中学校

3年 玉城 南帆

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「沖縄に雪が降ります。」そうラジオから流れたとき、私にはたった一言しかおもしろい浮かばなかった。

「やばい。」と、その一言だけである。本当なら、感想だけではなく、疑問や考察など、心では様々な感情があふれていっばいになる。でも、その感情はどうしても、「やばい」の一言のバリアによって隠れてしまう。

よく考えると、掃除の時間に一匹のクモがでてきたときもそうだった。「やばい。怖いね。」と、たったそれだけで、クモの怖さや驚き、気持ち悪さまで表現するのだ。逆に、おいしいものを食べたり、何かプレゼントをもらったときにも「やばい。ありがとう。」などと、ただその一言だけで、その素晴らしさやかわいさ、うれしさまでも表現するのだ。

これらの「やばい」は、全て意味が違っていて、捉え方も統一性がない。つまり、「やばい」という言葉には複数の意味があり、大抵のことには使えるということだ。しかし、一見便利そうにみえて、実際には私たちの表現力を奪っているように感じる。なぜなら、どんなに大きな出来事でも、ちっぽけな出来事と同じ、「やばい」で片づけられてしまい、言葉の世界が限定されてしまっているからだ。随分ともつたいなく、寂しいことだ。私たちには「やばい」以外にもニュアンスの違った表現ができるのだ。

このことは「やばい」という表現だけに言えることではない。例えば、何かおもしろいことがあったときの表現だ。私の周りでは、「うける」や「笑える」などの言葉が飛びかっている。実際使っている人は多くいるとおもう。そのような中、私は一度だけ、他の表現が使われるのをきいたことがある。ある日教室で数人の女子と話していたとき、アメリカ人であるクラスメイトがごく自然に使った。

「ものすごく滑稽ね。」と、一言。そう新鮮な響きを残したのだ。その雰囲気私たちは笑い声でかき消してしまったのだが、私にとつてはとても衝撃的で、偏見ではないが、その言葉を発したのが外国人だったからなのか、と自分の中で戸惑いがあった。「うける」などという言葉は、まるで「はい」「いいえ」のように同意を求めるようなものになってしまっていて、まるで感情すらもみえず、すぐ空気から消えてしまっていた。でもその新鮮な言葉は部屋はどこか片隅に、脳の奥底に残っていた。「うける」の一言よりも深く、心からおもしろいと思ったことを表現できる言葉である気がしていた。私はそれを、きいたことはあり、理解はしていたが、実際に使っている人を前にしたのは初めてのことで、これからも使う発想は全くなかった。また、私はそのような言葉を使ったことがあるのかという疑問も浮かんだ。それと同時に無意識に、私にはないと冷静に判断してしまっていた。

私の周りの身近な環境である、ザワザワとした教室で目を閉じて耳をすましてみると、「やばい」、「うける」など、ありきたりの言葉ばかりが並んでいる。「沖縄に雪とか似合わない、やばすぎ。」と語尾にも安定してついでくるがあっけなくピリオドのように消えてしまいそうである。

私自身、そのような言葉を日常的に使っているので、相手にはただの点のように促えられてしまっているのかという失望感と、一瞬の「恥」を感じた。また、今日一日の中でどれほ

どの表現に偏りがあるのか、という好奇心すらも多少あった。

私たちが使っている日本語では、一つの感情に様々なニュアンスの言葉がある。その一つに適当な言葉を選ぶことで、より相手に自分の感情が精密に伝わるのではないだろうか。言葉に多様性があり、少しのニュアンスの違いを表現できる唯一の言語だからこそ更に学び、肯定していききたいと思う。それらをすべて活用して、自分らしい日本語の表現をみつけたり、相手をより理解するカギを言語で探したりするのが、私たち日本人の使命であり、目標ではないだろうか。